

披沙揀金

三

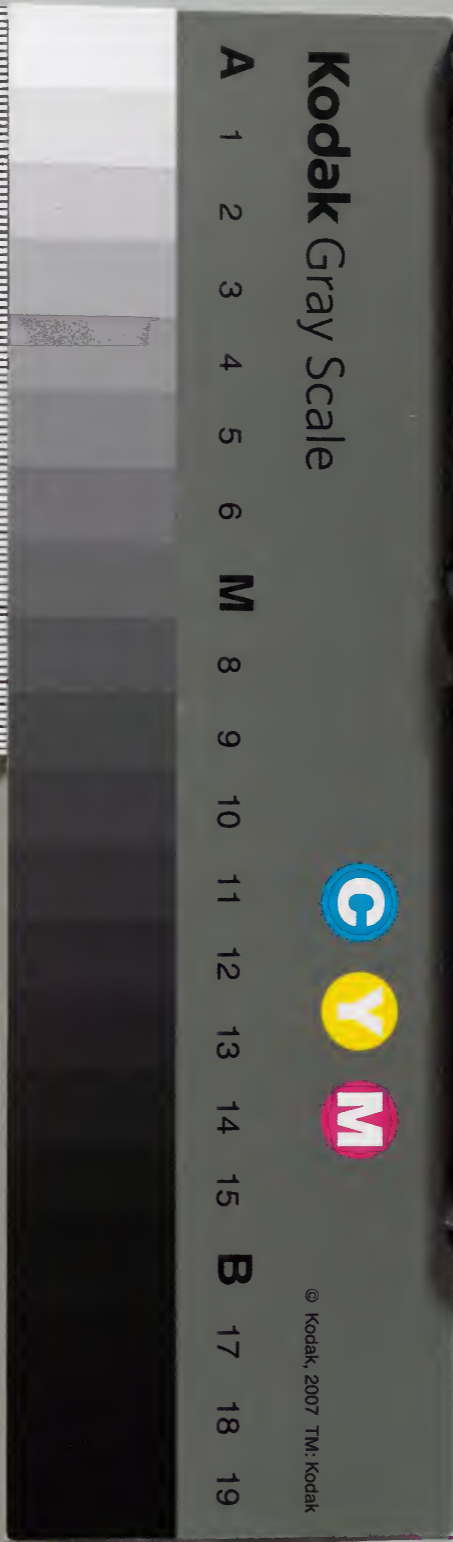
竺

共卅四



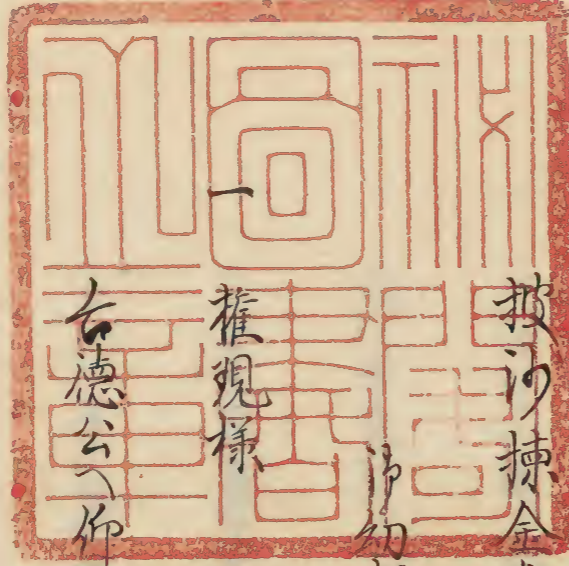
庫	文	閣	內
一五九	三三	三三	和
函	天	天	書
四架	九	九	類
	冊	號	

內閣文庫	
番號	和 33169
冊數	34 (3)
函號	159 60



南 2.34

披沙揀金卷第三



幼少より仰聰明にして知義の法うさるる事

権現様

古徳公の仰らまはしむるに城下有らば然るべくは然れども三日

治京の邊く是う難ありと仰らまはしむる後世の花美を思召てある

色一 新蘆
面命

一 慶長五年上杉景勝伊退治の爲六月十八日

家康公伏見を治まらざれば大津の城を以て京極宰相の胎を献じ

其晩石部より旅館翌日水口にて城主長束大藏が浦田屋に就
りて付礼して大藏父子石部まで伺ふ仕所明朝可き為入
由仰らるるに付長束悦み水口へ歸る然るに其夜成の刻斗り
俄に石部を居るを以て水口邊を夜中より通るるに後し長束
方へ使者を遣はし弟に之を可き覺悟の不儀と申事有
くは付急罷通候迄須臾念ふ作りの水口上より來國光の血脈
指を遣はる長束仰天して使者より速罷出上しきて系
上しては道具の拜願は付礼を可き上歸り
岩淵原
祐別集

一 大津京極高次方より水際とせしれりは付日暮よ及び石部へ
向著遊り而して長束大藏父子系上候に明辨の水口の城より
報付候上りし由に出入り度有預いしに成程此城可き成有
し作らるる如何と思はれ共其城中に石部を以て後駕を成水口より
城中へ大塚幸右衛門を以て使者より仰せしむる由約束の通り
今朝此之方より付礼して思はれ及此方よりいさきより成して
名叶出用の儀出候由に仰せしむる由に上りて長束候
其日の由旅館上しきて水跡を去りし事より此後多き存り付

中帳乞方是まゝ糸上の版下より遠くの皮は糸は満
悦く旨は仰来國光の由帳持をさす由帰し一玉成の字なり

落穂集

一 神君赤坂へ伊着の時大名元みかへ由迎は出柳生但馬も
早く在町を出るも九鬼は押らさ由迎は道まていり
赤坂へ出迎ひしこよ

神君伊駕籠の内より南宮山へ續くる山上の歌を由覽か
さし由駕籠傾くほとれくを傾け由覽由駕籠より見え

る方より大名元をくを柳生進へ出て由より目出度と中上
何れも是より云りてこよ仰らまはる各能は出ゆ大儀
思ふもさす明日はあへ八幡より合戦を始へ一必是伊勝

伊をさなり 永日記

一 關原より治部と刑部とのつりつと尋ね出せよと田中左部
を仰付時石田は今日かきり如くある身より明日も
いっやうの大事をい存えものあるを田中一人は穿鑿仰付
るい合點いれ事と大名元が恨み心ありさす石田は田中

生捕り其時伊意田中ハ治部と挨拶より故に疑ひ
思ふにふりて此度治部を生捕出さるるに以て伊
寄を散せしむるに伊意をさしよたしに諸大名公の
深き亦を存りていふも伊至極の也意と尸よる若
今度石田を尋出さるる田中ハ身上危き事と沙汰なり

武功
雜記

一 慶長五年九月十九日何方の人よりや不先武具甲の着
き具足鹿毛の馬に乘り金箔押りさいつらの指物より

伊先ハ云糸比丸と前後亦交通り伊先ハ云糸比丸ハ先子の
大名丸の使番よりして有りといふを付人とも

家康公素物の内より間二十町も有る金箔のさいつら
光るを伊覽に改めしと伊意より改めしハ落人なり
成敗仕しと伊意より道の耳より討捨作板板ト
齋記

一 翁伝て曰

家康公慶長年中より上洛有る時二條の亭より或る
物伝の片いで今日本國の諸士を見るに加藤肥後と

はく者らるまきと宣ひし事いふ多佐渡もとね
ううして居らるる目を明てゆくい共今殿の巻は
誰の事とて伊彦作らるがと申す

家康公宣ひしりい加藤北後と事ありとらういふは
太閤の代は虎と助と云ふ人の事と又申す

家康公の御下天下一かくらる加藤主升と事よと宣ふ
佐渡も事あり左共今の事をも失念あり殿を武田
信玄の事又い謙信信長の事何れも能く存あり名を得

はる諸士数多ううと然るは加藤北後とほとある事い日本
よ有まきと宣ふ事いさても加藤北後をは能く
名人と見付はしる事い殿のやうよ人と申す
作らうけし事い加藤教の事い殊外と
言はる事い申す

家康公宣ひし其方と申傳より我より知らる加藤北後
はよかもの別と事い西國の事い彼人よ任せなきと氣
遣る事ありと一川の麻らるる類と宣ひしは

佐渡も中川の其麻と宣ふ事ハ如何松の事より也産作
その中川に

家康公宣く物の危き公らうとせうの公き入るくにあし
はきくる公き入るくはかれはく者有まきと宣は
佐渡も中川の其物の危き公らうて強きくはハ大キ
ある麻も勝頼かとの物らうて強きくはハ大キ
よ亡し流ふそれハ能き士ハ大キある麻も惜きもの
と中川の其一座と京の町人江戸も未産は伺ふてうけ

くぬりくは加藤肥後も是を告るは告知はゆき
加藤肥後も聞てさうハ

家康公予を危きそのと見流しけるものありと合點して
其より新事抄毎に危を深くして身を重く持てうけ
加藤肥後も死して逃年と至て佐渡も息が多上野分佐
渡も中川の先年

家康公宣く日本は加藤肥後もほと武勇もつる新事
わたりてよき侍らるまきと仰有ける當家とて歴

武功も人の勝れざる者多し〜とこれにほめ給ひて加藤
北後を世にまされざる者のやうに譽流ふ事不審多き
事ありと評して佐渡を聞てやうの事い其方か〜と分別
し居る事より其子細い其加藤北後を能者〜と
稱し譽流ふより其子細い大坂は秀頼公ま〜
ま〜と左自然加藤北後と西國のものを〜と秀頼公〜と
これに關東の〜とま〜と〜と事第一〜とけ故り
加藤北後を譽流ふる卒亦ある公〜と西國の

事をいかに任せ流し度〜と一庄は伺せ〜町人等
此事をうけ〜と北後守への馳乞は告知せ〜と北後
此義を乞〜と身全く持て卒尔の事を〜と
故に北後守の一代にやうき事を不催〜と是偏は
家康公の智意深〜と武畧の爲に宣い〜と
を稱し〜と不審多しほどの智意〜と日本は是なる事
事不審多し物を事よ〜と公を付て不威ま〜と支せ〜と野介を

佐渡も志〜とけ〜とあり
翁物
語

一 慶長六年二條城出来よりして

安國殿上洛二條城に入洛し城外見聞つりて本多中務大浦
を以て我々の注文は相違し大うしるやと尋ねる本多中
上云は注文餘り小き故告中合せ一倍は仕るは上洛の時
は遠る者もは用公の為は安座をまじはば聖もま存し
重し仰は吾家の老臣もまある者もまあるの不足候とてら
かど申さる先よく聞け我々の参りみ七日遠るの時二間
半の堀を人のまじは小敵の分は防易し其門一歩日も経れば邊國

の時方馳集る者十日とも経れば關東の大軍馳上る候は
敵足を踏止事成まし二三日の要害ある友かくのまじは
平屋形とてし石若されし信長公のまじはるは慮の候は
此難を道はれん者あり我は上方の仕立人まじは關東より
跡より此城を敵は奪取れい又取返す時むつりく負ふる
ましても楯笠あるものありさやうの事を辨へるかやうよく
籠りく事ありさる不くとれ怒らる本多中務大浦の面影み日出
仕を止む其後免つりて出仕す

安國殿
印家譜

一 右之侍督殿常陸公殿所お人遊日所元服武具着初仰付
 是色一とく所武具方けしぬり黒糸の所雷甲所
 矢部太刀鞭未配軍麻例の如く搦へまよりけし下とく
 りる右之侍督殿より所養父平岩主計次親去常陸公殿へ
 安藤帯刀けお人ふさせ帯刀一日の中は敵の大將
 ぬ人の首を取る初の人されし不尤主計は戦場をもふしれ
 ともさしるる名もきくとも其上よと云ふる一家乃主人
 野列を討又信康公の所母堂の事取まらぬし去北をき人

あまいといふ所をきくとも其日はあつたお人より武具を
 家康着初さきとく一とく所帯をさせ流しぬり下とくの
 評判は遠いなる 武野燭談

一 筒井順慶子同任賀守は任賀國の大守也所改易城法取り
 お多古中務殿松平死驛を殿其外歴、大勢を遣作て跡を
 駿府よりかして
 権現様上意は任賀守は所下とく一とくなり所の居分
 ころし何事もあはれし小人教を遣作て其人教の入付跡より

既く遣りて先よりける者怪我するものあり大勢をく不
入して帰りける分ちては苦もあつた若原一揆の時
板倉門脇殿討死する一と安井右衛門尉の各陣守り成
算哲の事非は

権現様上意より作らるる果して内膳殿討死を遂げ

寛元
元年
聞書

一 慶長年中

家康公京都二條の亭へ左大臣秀頼公を招きし時加藤肥後

浪野紀伊守も友人も秀頼公を護りし事あり左大臣を供養し
家康公秀頼公をとりては流し事斜めは右の友人をも
い出

家康公より刀を中へしむる時友人共頂戴も共に行き
家康公を討て見流しは加藤肥後を刀を拜願してはは
頂戴しむるうちよそよそは目と付共後頂戴しむるを

家康公子より流して加藤肥後を目を付する方角此一度より
大方愛宕山よりありし事と覺しり定て愛宕山へは預せし

よのちうとて板倉伊賀よりいとうの口邊をとりせ渡り此度
秀頼公二條の亭より災難をのり逃れつやうよとて一七日の
獲摩を以て因茲彌

家康公加藤北後より心を並流し事深う〜〜あり其刻
福徳左衛門大丈も秀頼公は供奉せし〜〜て名叶者なり〜
不労氣ありと披露して大坂よりる世間の人嘲哂より福徳は何
時もうやうの刻に作病より者なり〜云あ〜るよ

家康公の工丈より福徳は今度の病に二條の亭への供奉より
魚子も高き〜〜自ら予秀頼を今度亡きん〜
〜〜〜〜〜加藤北後も浪野紅江もあ人の秀頼公
の爲に二條の亭より末代より名を預り〜〜〜
大坂も秀頼公の母儀より是を人〜〜〜
苟も福徳も秀頼公の末頼もれい秀頼公の母を〜〜
大坂の城より心を掛て切腹せん事何の疑り〜〜二人内様
〜〜あ人の秀頼公を付一人に作病〜〜大坂より〜〜
〜〜の事淡く〜〜〜〜太閤秀吉〜〜人を見知〜

取らざるをあらうと宣ふより一語もあまら
久世本
翁物語

一 大坂の陣の時

大神君駿刻より出發駕の刻中多上野分より出發の
軍素良より甲冑弓箭を帯り供奉仕せり
神君仰られりいさる慶長六年庚子九月關原へ發向の刻
江戸の町人金二の者道中具足を帯りて供奉せりける
村越茂助直吉具足を見て予へりる金二町人の身とて侍
馬人足本の事を走り出さる武具を着用せりりりり

予はて先赤を見りといひて果して獲一願本の枝よかけて
有る所の具足元てあるへりて取寄せ見りて金二の具足
あり則金二をらて出尋者よ金二畏て云よと後分精出
是まきてい著仕りていも次第より多し草臥れより中々著
用仕りて依りの手持する所より
神君かくも者きこし仰らまは笑ひぬれり仰らる
具足いあつて著せりていまきこの時後よえりて依り供奉の
人法隆寺より往去し移せ後よき洞を著りて申をいふせ

さういふ事今下町に金二所ありて出陣馬所用也一者

おん
掃帳
雜談

一 大坂陣の時の事と須田伯耆守

堂和泉と見廻り来て隠密の中より大将へ忠告し不為下は
時より如何とも大岡厚恩深し此時を別の方るや我も此時を
別の方るべき事か我等よなつて一筋の
白卒りたる事か我等よなつて一筋の

家康への忠告は如何なるべきやうの儀重く不可解と云はれ

又中十日計あり藤堂和泉も先日も中せし事あり別
去後いふ事是非いふ言ふまに正家以外の外は應之し神八幡
大菩薩強て宜し

家康への可中達と云ふ事と和泉と云ふ事と此事如何なる
と云へ帰るに家康は

家康公御陣へ系中上度子細らう和泉もい等の儀を中して
我等を遣はせし事如斯くして同公も任中せし事

家康公の御陣の障子を明後し和泉は

藤堂羅出る

家康公宣ふハ正宗心中其方うりしるよめも不違満足せし
と仰正宗も和泉を見て仰天志しり

家康公の深き御針策しりしと正宗内證しりし語り流し

なり
久世本翁
物語後集

一 大坂の時

神君御遊習の中よ不寐の番を仰付しりかむと思ひける
或夜の時意よ今夜よの方より狭物の音りし汝等もつや

仰せきし聞しりしと云ふの阿まハ別し寝衣を賜る石聞付
そのと云ふ寝入しりしと証しり流し流る由よ自然よ寝入

番の出来せしりし
前橋舊
藏圖書

一 大坂夏の陣陣押の付橋の本綿着物着しり者しり也覽し成

何方ぬ者しり也問し成古し甲列穴しりし是も今ハ駿河宰相中
於後し是を由りし用列しりし又ハ馴しり者未し由合哉
内よ子也勝し存しり我あり晚し昔を也踏しりしハ小石結
遊身付の為し存本綿着物着しりし見しりしりし意たり

伊推尊君の不易感

紅浮圖
物語

一 權現尊君大坂乙卯の役は伊陣中干有精米各幾許伊集
五井

干綱一枚捕樽味噌經節有喜持来此外は金用
即贈長持一川の事なり松平洋慶より上意なり

よき意なり其貞救の輕少

あるに不日の成功を示させたまふ伊貞首がけり

志士
清談

一 大坂陣陳の時二條の陣城より火繩がき中干上作は火繩事

の關る時に疊の急をとり取火繩よりなるを何段とも考へての上意

たより
寛元
聞書

一 日向半を捕其外誰か伺作の言大坂を何者か居るは伊尋なり

日向半を捕りしる彼は之者か別よ言座外何れも竹流しを取れり

走んとす上ははれ意なる合して此の外はさう言成さる日向

はる下は付は成敗する存極をを並むりし出んとすも若

るあくる糸ゆはれ意なりを仰せり竹流しを取し走んとす

のひをえては人質を取るは合戦は勝りぬもるも入る

將軍様は為悪き候なりし付はさう言わぬをさう言わぬ昔も九條

門尉おとのけてはわさうの勘らぬ知しれ意なり中紅浮圖
物語

一 元和元年八月八日秀頼公生害の一左右をきこりし

大井所い出駕よき高板倉門松一騎出居うて成程出居密に
茶磨心い出城門焼跡出也京橋へかき出帰居かやうに
大合戦の後い大降しものありきいとのい意ありさうか
天氣晴渡り中いおもしろいもあはれ口迄よりいおもしろ
枚方より南より大雨降出し中い出駕の者もいさうい出る上
下めよ通し渡りい着い共二右軍い兵出雨具をさしよい使
京都二條の城へ亥の刻い着い板倉門松一騎よりい京府大
井門をいあきいい出陣のい苗ありいい思ふい中い

いいて開きい松門松又仔細も堅めい門よりいけ入門を開
いせき入大坂といい左陣のい軍い色をい存知 大坂即
陣書

一 権現様駿府い出陣い出陣い城門い若きい番九合居居
相撲をい取りい風い高城い付膽をいけい平伏い
されい度い

権現様い作付い重し相撲をい九合いをい裏へい取
いりい子い福阿弥い見いりい其のい為うい拵いい勝を
あついきい者仰いよりい出志いりいの上意いい度い

作しし諸番以中右の次第を聞及びし其後ハ産者お撲
停止よさり渡りしなり
駿河
土産

一 補若駿河は伊豆城の時番人も取違さましくいふに出てはるま
或は相撲或は取巻かゝて出たり一人内番番のさ
のこし並り或は取巻と表へ出たりはるま當番のこの唯一人
相撲のものをい見ると大は怒りせ給ふて事の次第具し
是等は付たりはるま言上しはるまは残れる者を大に
去りせ給ふて入出する一人はるまのこは臆者なりたなる

者ある一戒りし作しはるまはるま一人も取違のさ
さとのさうりはるま自然の取巻やみよりうかふる人のけり

前橋舊
蔵聞書

一 家康公はるまはるま廣間へ出出たりはるま番元
一人おいてはるまはるま番の者お浩々し仰りつて
御機嫌よろしうはるまの一人たり一人はるまはるまはるま
浩く作しし相撲見おは出たりはるまはるまはるまはるまはるまはるま
そと仰りつて奥へ入らせ給ふ深き池へ入らるるはるまはるま

備前老
人物語

一 権現様駿府より成り座より番人も相討さすまで一方へ出て
 御廻り辻相撲かゝるに於て一人は強し居る或は一人
 表へ出所者一人を強しを御覽に成大は由金祿者へ吐く
 邊は一人強しに臆病なるを言者あると仰けまは
 己後一人二人は強し強しなるをかくる強し人々
 出る石叶のこゝに於て番人は格勅を此中大坂陣の言者
 元へ古光のともりへ聞せけるなり
續武家
閑談

一 権現様伊治世は宗論起り津土宗と法華宗のつゝし已に

對決は仰付くも極つて國中の諸人我宗を馬の族に
 勝負ありんと取沙汰まらるるなり

家康との法華宗坊主を仰付りて出され密によきなり
 りりお傍りとの禪論明日我先と對決さすなり
 宗奇勝する時申しき事ありといつてさるるをいさ
 負ける方の津土宗といひ志強しなり心願はまひられ
 よし仰りる日蓮宗はきんして出法より明日對決し及
 ち必き我宗勝へしとて時相争は成る津土宗は説ふとい

首を削らば歎きしる所の澤土宗門を仰ぐや下されり
重て祥瑞起らば公威は外抱も座あく出らば首預いさ
作と憚るくべき

家康の御座を成しつれも明日早天より座あく
より喉楊り日蓮宗各退ゆけを証しすまは澤土坊主
らまの心と問ふは澤土坊主一系中法より法華
宗徒等祥瑞及ふ事も我宗の祖師を言ふ友の候なり
法のうへよりまき事とて是をく作らば修まき一正

まはまきとして死刑の由新ひべき

家康の御座換へ我がまき言ひは尋らば座を強き
頻にせうみくは尋らば退き元一月は座換わりまは法
中せくと問ふは澤土坊主の云く志し負ける方佛法
恥辱されいさ名を脱へべきや謝へべきことあり

家康の御座を成しつれも明日早天より座あく
各退ゆけを証しすまは澤土坊主一系中法より法華
宗徒等祥瑞及ふ事も我宗の祖師を言ふ友の候なり
法のうへよりまき事とて是をく作らば修まき一正

其財よとてひらき事い降古勝あり五細い寂ち我法華宗よむ
つて負りし事問し降古の宗別絶せんをく
相子の存在を未肯よと致し是邪態より起る所の逆言あり
又降古坊主いこそを脱せんとは是佛法の大法か人天
下の政道よ金く構いする事より出家法の上よといはれ
ある致ありて是に法華を負へるとかありとよきことあり
果して明日の対決よ降古宗勝りて是をいふ人
家康このれ智恵を感せよといふところには諸家の宗論

かゝりいすゝり即法度仰おされらるゝなり
校合
雜記

一 家光公竹千代君とP孝の治は父母の御寵光國千代禰ら
かうりらるゝ事なきを兼てせしむるはけり或附

東照宮より竹千代殿伊兄弟より久しく御対面かはあ人
若くは同道よりはなき事とてこの事お伊兄弟より引
けりていふ事あり

東照宮竹千代殿に仕へて御席上候かゝり下の方より
着座あり給ふ國千代殿傍りて着座りんと進み給ふ

いかに國に何事かあるか一と云ふ事の下にむせし多葉子出
ても竹千代及よ氣のれと云つてを証して國よとくしせ
よと仰らまはる附くの人まゝと格別違ふあいにいひらひ
し次第

秀忠公も夢一とむく伊密族の事も仰りけることや

武野
燭談

一 相國秀忠公伊中公よお國橋へ天下を也務と威度思ひま
竹千代橋より伊籠也も取まはり

東照宮夢石或時竹千代橋お國橋へ久く伊對面を威しれ
伊同道より出する事れゆふよよと云ふや早速伊同道
より伊系を威ゆる

公竹千代及大社へ一と有る伊座より上原よ出請一と威有
早速上原よりせ流しか國橋も續て上原よりん一と流ハ
此叱勿辨を國に何事かあるか一と仰りし座より伊也一
を威し其時餅を拵出さる竹千代及への供の座を呼
催しと有る此次の間一氣は是れ一と有るゆとの伊事一と

仰上段の隆へ由呼まはし自身不届を由接し成云下其其子
國の供の者古を呼出へ仰らう伊供の元也産の間へ入ん
それ比勿難あへ仰らう餅を由接由次の間へ由接し成
そましくへ仰らう右へ松子相國極へお母伊公お蔭く
成りまへ仰ら丸へ

東照君伊動産の附

相國様茶伊香極色へ由馳走仰ら竹千代極へ仕舞いへ
伊目よむけゆわへよ伊香極仰ら竹千代極由之舞せ

後いへ田村の音好れ腕の白糸へ云下り未忘れさせ
れへ殊外不真なり

東照宮さまへよへいへ仰らま由例よ未させ給ふ仰り

お國舞ゆへ伊香極仰られまこいやくへ雲林院を首尾く

舞給ふそのまへへ伊香國を由自懐まへ

公もまへ伊氣色よ由叶て由成への思ふあり雲林院へ

出まへるよ竹園村の石出来あるを竹を代換くもあへ

思ふらんむつへせ給ふ

公卿覽しし竹ふ代屋いれや歎く事とあるは將軍
しし者ハ寐りし事とあるは苦しし國がとらやある者ハ
寐せし見る復たる國がとあるは善用ある竹ふ代屋の
以後よないうもははるよ重寶あるとの事事と更よ
お國柄の寐は夢航なり
故先
諸族

一 神君の伊弉諾より何某朋友の権某より一者亂ん
切ふしる時流もよへ顔は底を影りかゝ押はけ
捕へしよと意はけちるきつこされも抜刀と持る

者ハ流もよへ何某事不案門あると伊弉諾有ん
若くやあるを由賞航りい白及ハ流もよへ何某事柄
をいしはは非業の死を影り人何んと伊弉諾意は
るハ諸人感しし事とあるは
武備
駿

